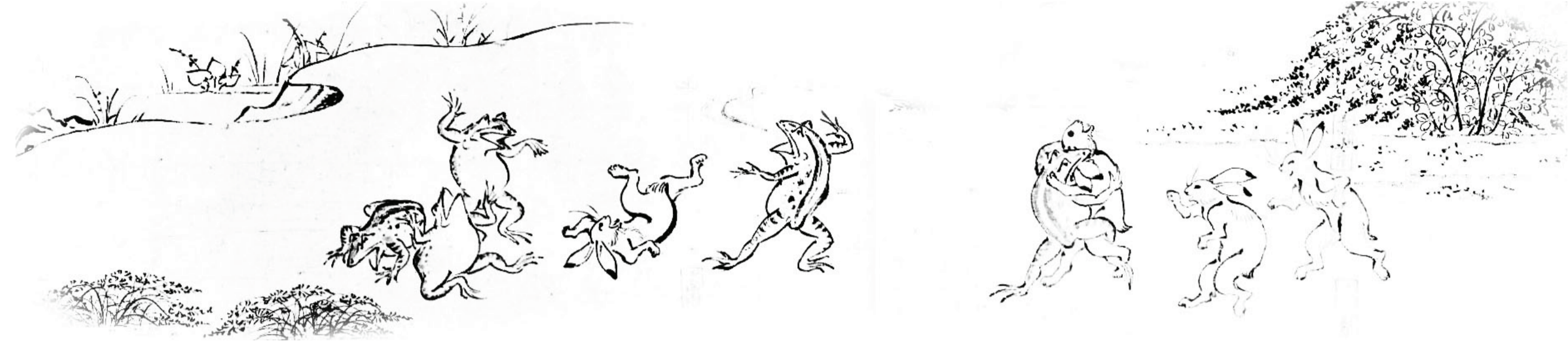


山川草木人の命の営みをつなぐ国土形成

～われわれ人間は大自然の一部である～



提案の背景

「文明は欲望の充足によって発展した」という考えに基づく産業／金融資本主義は経済格差を拡大し、その怨念が充満し世界は地域自治の蹂躪、紛争の拡大、生物多様性の低下、温暖化ガスや化学物質の大量放出など大きな危機に直面している。これらを克服するためには、欲望の適切な抑制と人が自然の一部であるとの考えに基づく国づくりへの転換が必要である。

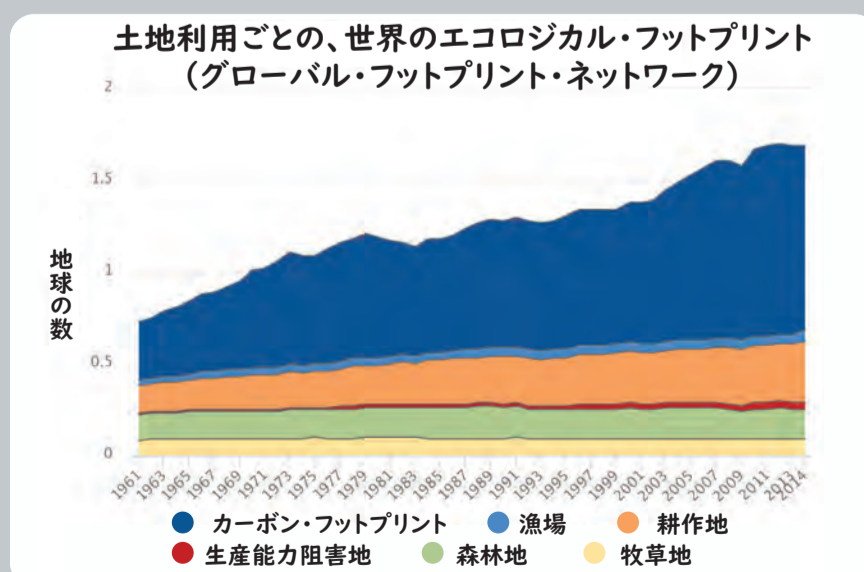


四天王のひとつ、持国天の仏像。国を支えるもの、という意味が込められている。

人間もまた、まずはじめに、時々刻々、単純で事後的な存在として、路傍の石と同様な、「物」に過ぎない——にも関わらず、いのちが与えられ、維持され、そしてやがて終わるといふことに、「大自然」の大きい不思議がある——このような根源的な認識。これを東の行者は「山川草木悉皆成仏」と言ったのだと思います。来るべき世紀においては、これが世界の人々の、標準的な認識になればと思います。

抑えつけられている邪鬼
→とまらない欲望の充足

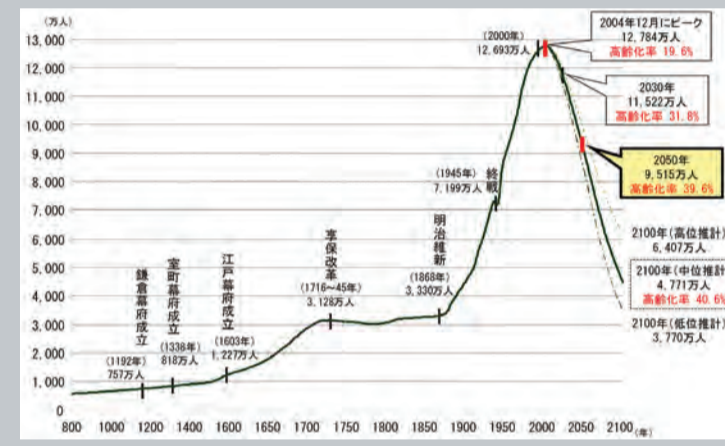
地球1.5個分を消費する生活様式



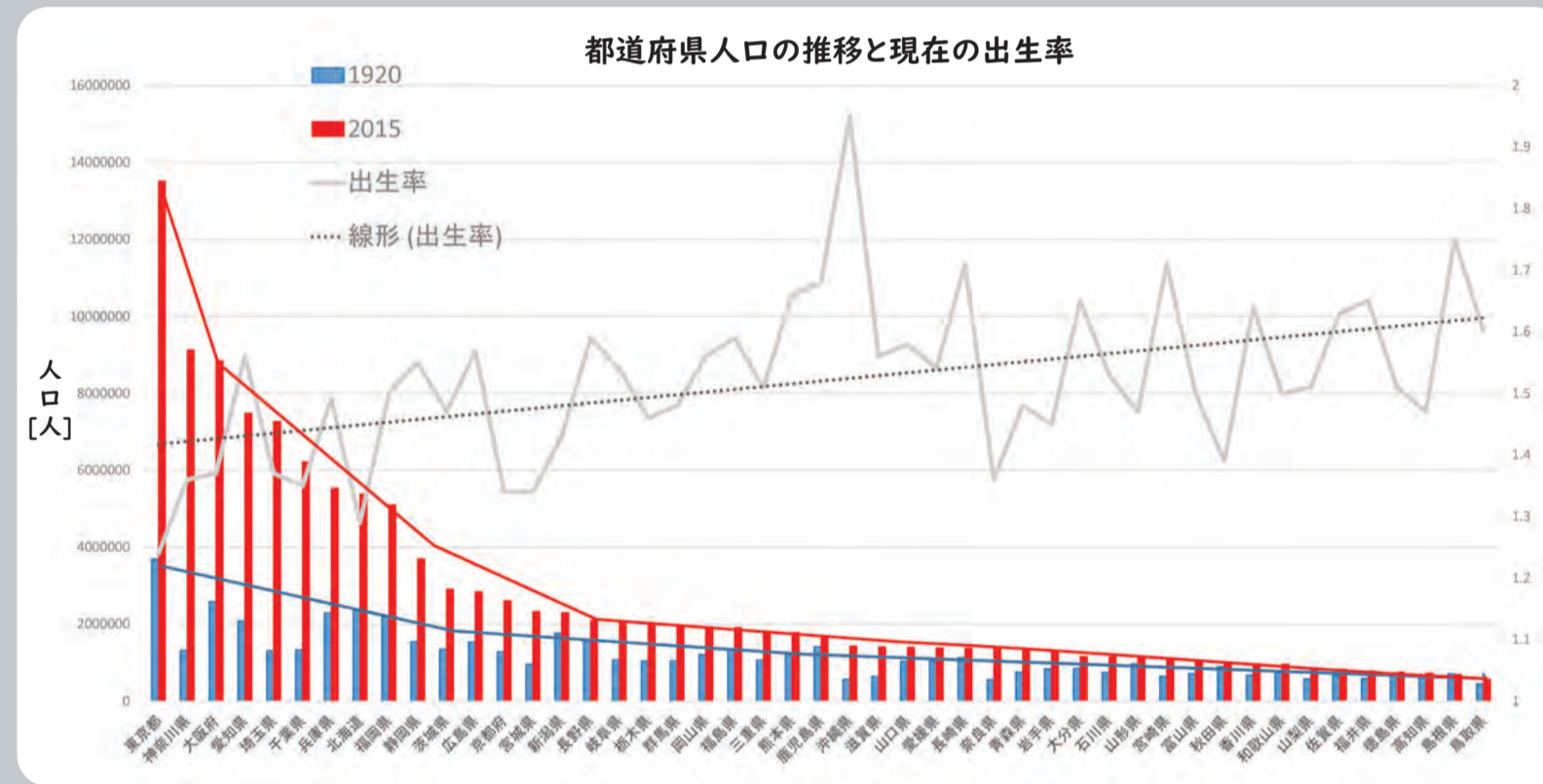
人々が今の生活の仕方を続けていく限り、持続するのに必要な容量をはるかに超えた負担を、地球の生態系全体に与えることになる。その指標であるエコロジカル・フットプリントは、すでに地球1.5個を上回り、破局へ向かう要求を、地球環境にし続けている。

偏った人口配分と急激な人口減少

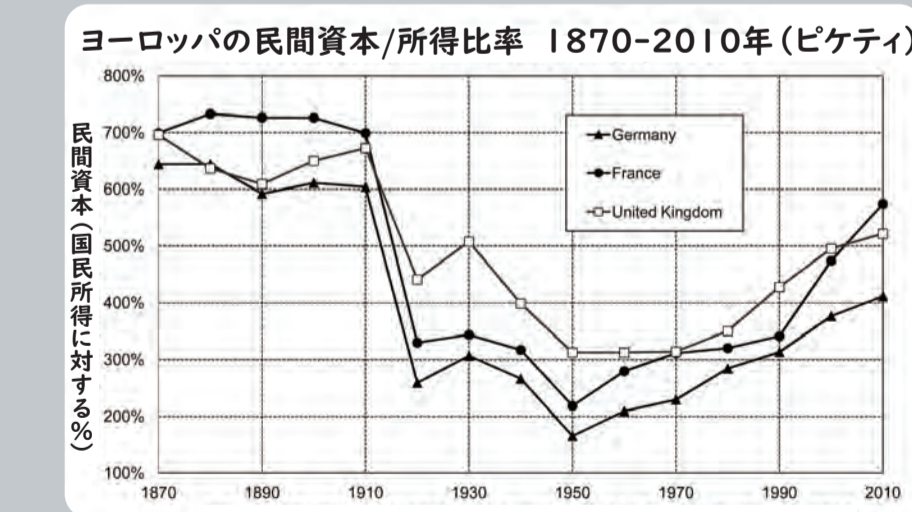
今後100年で総人口は1920年頃と同程度まで急激に減少する。現在の人口配分のまま減少すると、大半の地域では存続が危ぶまれる。一方、現在人口の少ない都道府県の出生率が高く、子どもを産み育てやすい環境であることがわかる。日本の人口減少を抑えるには、極端な人口集中を是正し、都市から地方への移動が必要である。



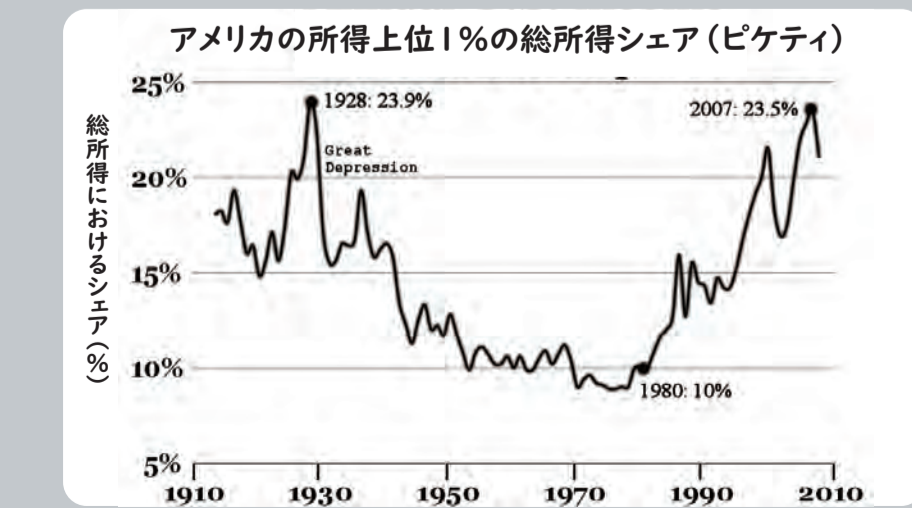
出典:「国土の長期展望」中間とりまとめ概要



19世紀と同程度の格差社会に固定化する世界

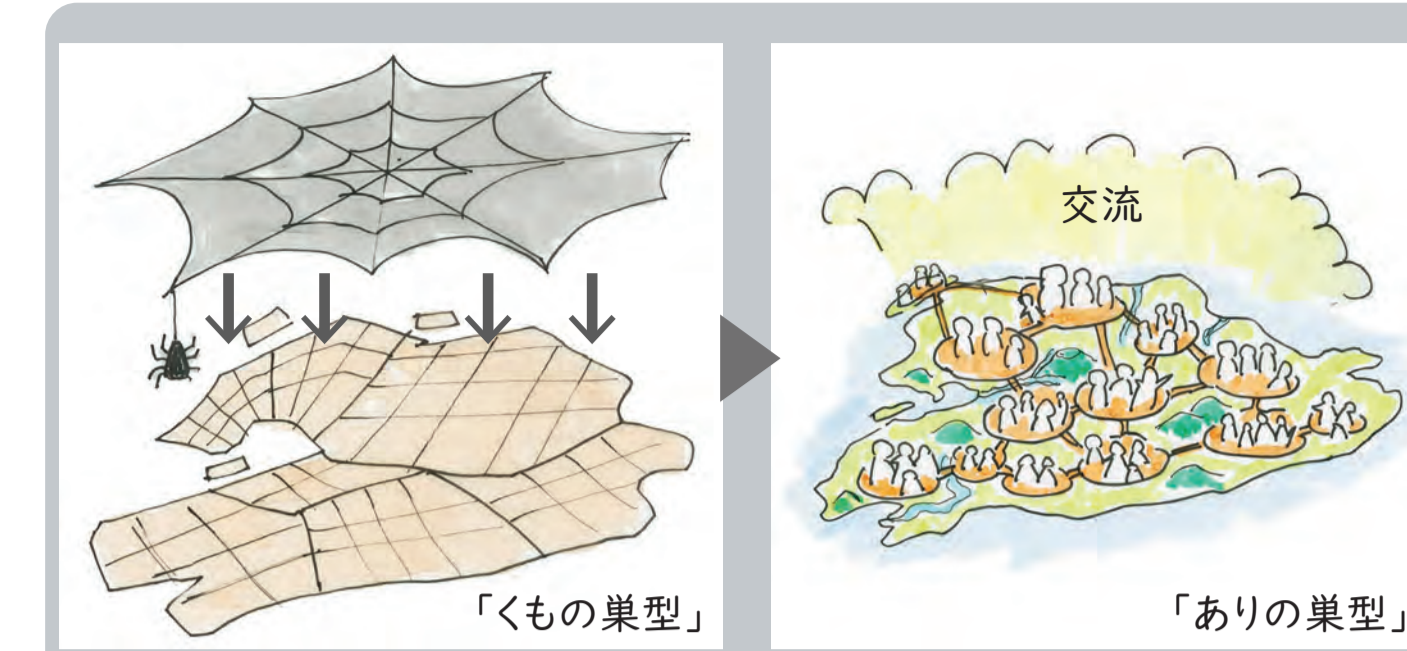


欧米や日本を含めて、現代の社会には、19世紀と同程度の経済格差があり、しかもそれが固定化しつつある。20世紀の2度の世界大戦により、一時的に格差が解消された時期の後で、復興による活況が一段落すると、こうした固定化が目立ち始めた。※民間資本所得が国民所得に對し増えると、資本配分率が上がり、格差が拡大する。



アメリカの所得上位1%が総所得に占める割合は、2度の世界大戦の時期に1/10程度だったが、いまは1/4。1950年代に90%あった所得の最高税率は、いまは35%。「アメリカン・ドリーム」は、過去の理想になってしまったのか。

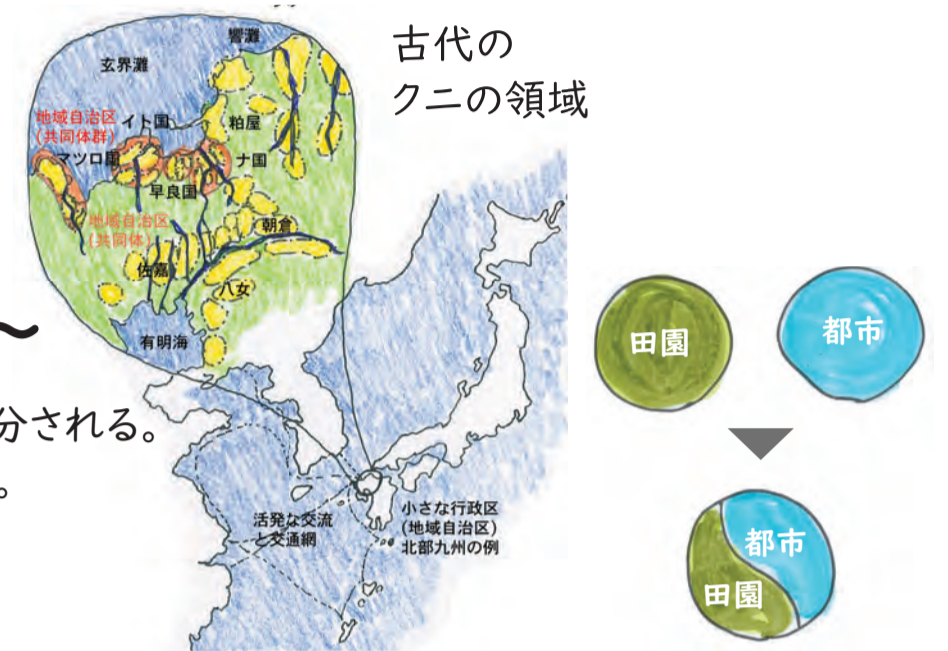
22世紀の国づくりコンセプト



これまでの国土計画はトップダウンで定型的「くもの巣型」。これからの計画手法は、多世代共創により、つぎつぎとそれぞれの地域でクニが形成される不定形の「ありの巣型」を目指す。

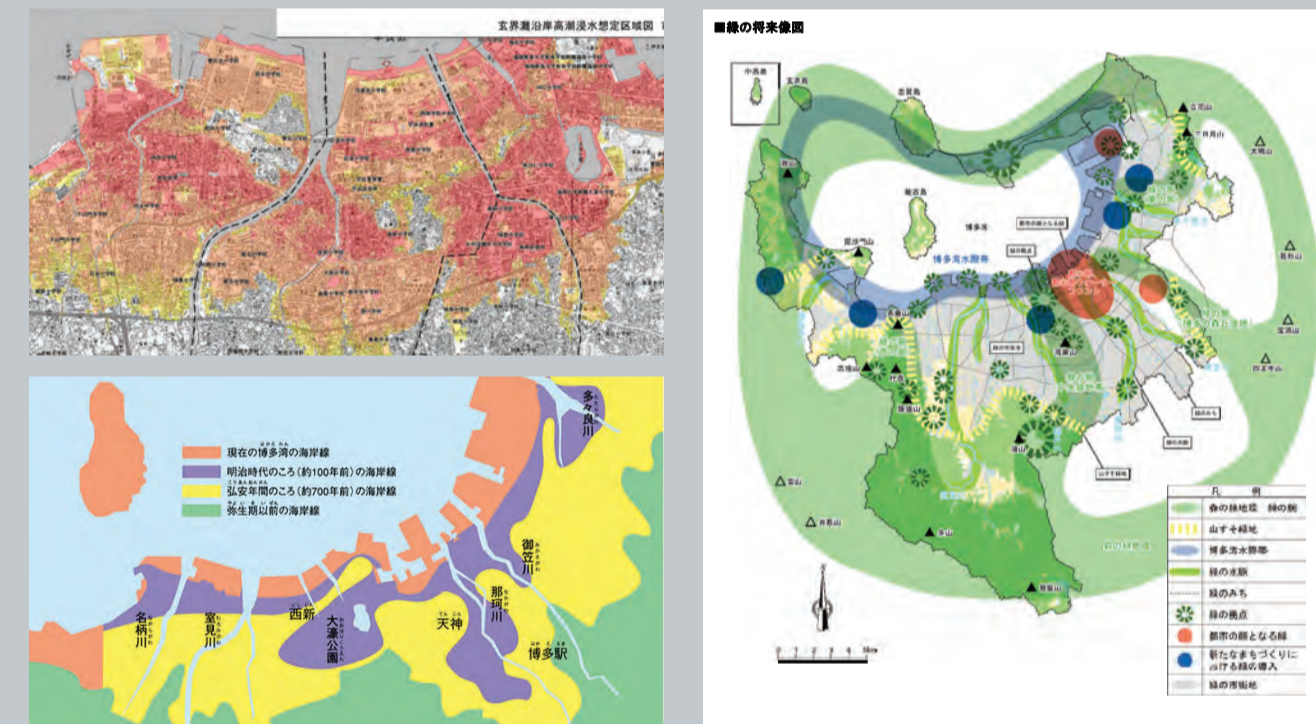
「都市田園⇄田園都市」～北部九州におけるケーススタディ～

北部九州は、古代のクニの領域を参考に地域自治圏が形成される。これは自然地形や生態系のまとまりにより区分される。都市と農村が職・住、生産・消費、能動・所動といった分離により機能分化した結果、フットプリントの増大を招いた。その解決のための空間構成が不可欠である。都市を田園に。田園に都市(賑わい)を。都市と田園はお互いに交流を図りながら、尊重する関係性を築く。



福岡地域自治圏

博多湾沿い、樋井川、室見川などの河川沿い、向背湿地、油山の縁辺部などの災害危険地帯はグリーンベルトや湿地として自然生態系のサンクチュアリとなり、安全で水と緑のアメニティ豊かな市街地が形成される。人口の減少に合わせて、都市内部にも適切に生産の場としての農地などを配置し、小学校区を単位として徒歩圏に商業施設などが立地する。



出典: (上)玄界灘沿岸高潮浸水想定区域図/福岡県、(下)福岡の古代の海岸線/福岡市港湾空港局HP



現在の福岡市の22世紀の姿 (地図データ: Google, DigitalGlobe)

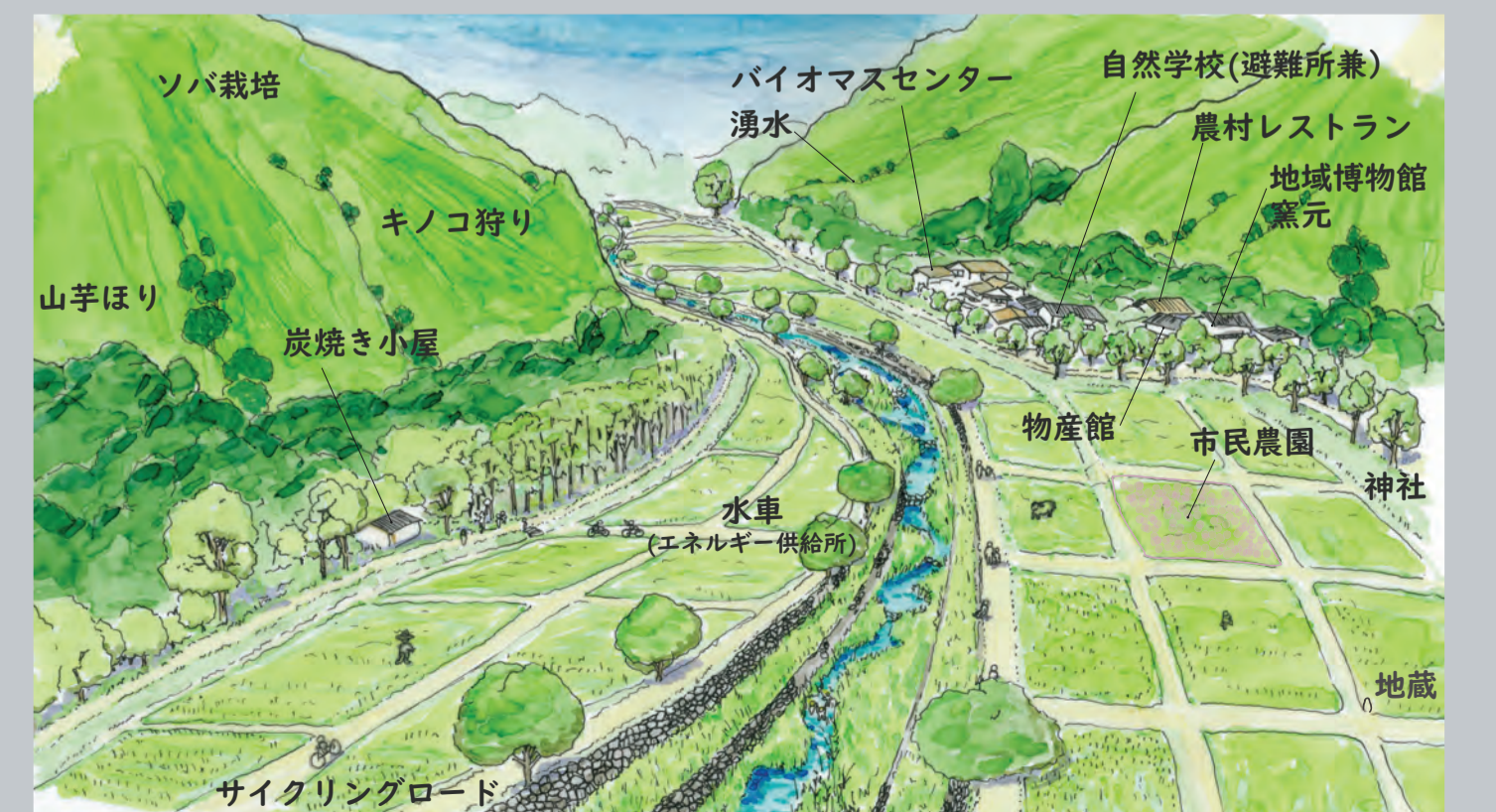
朝倉地域自治圏

エネルギーや水利用において自立できる規模での集落を形成する。土地利用は治水地形に沿った形で展開され、集落は大規模災害時においても被災しない場所に、河川沿いは田畑が中心となる。山は頂部から山裾にかけては草原として管理され、集落沿いには雑木林や果物林を形成し、山の恵みを最大限に享受でき、自給自足で地産地消の豊かな生活が展開される。多種多様な生物が生息し、豊かな生態系が形成され、美しい景観が広がる。都市部の人々はそれらの魅力を体験するために訪れ、頻りに都市と農村集落、他の農村集落との交流が行われる。そのため常に人やモノや情報の行き来があり、固着しないような人の流れが形成される。



平成29年7月九州北部豪雨で被災した朝倉地域の様子

(上)小石原焼の窯 (下)日本最古の実働する水車 出典:朝倉市HP



現在の朝倉地域の22世紀の姿